

《シリーズ対談：教養教育とその周辺》

学びにおける身体感覚の効用 —スポーツと教養の接点を探る—

佐々木康成[†], 小西 賢吾[‡], 杉林 孝法[§]

1. はじめに

本シリーズも6回目をむかえた今回の対談では、教養教育よりもむしろ専門教育に主に携わってこられた教員をゲストとして招いた。ホストである佐々木と小西は、FD活動だけでなく様々な場面で他部局の教員と議論する中で、教養教育とスポーツは意外にも親和性が高いのではないかという印象を持ってきた。それは、前回までの対談において学びにおける身体の問題がテーマになってきたこととも関連しているかもしれない。多様な視点をもってなにかを「まなぶ=まねる」あるいは「身につける」とき、抽象的な思考のみならず、それはより具体的な身体経験と密接に結びつく。そこで、競技を通じて身体と常に向きあうことになるスポーツの世界から重要な示唆を得られるのではないかと考えた。今回は、人間科学部スポーツ学科の杉林孝法准教授をゲストに迎え、競技者として、また競技指導者として、そして本学での教員としての様々な立場からの経験とスポーツ観とも言うべき考え方をもとに、教養教育との接点を共に探る議論を進めていく。特に、オリンピックに2度の出場歴のあるトップアスリートとしての経験や境地から得られた身体性や価値観のありかたについて興味深い議論が行われたので、読者とともに身体と教養との関係について考えてみたい。

佐々木(さ) まずは先生のプロフィールをおきかせいただけますか？

杉林(す) 大学は筑波大学の体育専門学群で、卒業後大学院に進学して、それと同時に実業団にも入りまして、ミキハウスでした。

さ) しくみをわかってないんですが、その場合はどういう立場で入られるんですか？

す) 私の場合は社員としてでした。出社はしないで試合に出るということが仕事でした。いろんなパターンの仕事がありますが、私のようにフルタイムアスリートと言って、給料出すから競技をやってくれっていうのとか、パートタイムというんでしょうか、普通の仕事をある程度しながら競技もしてっていう人とか、いろんなパターンの契約がありますね。私は、選手をしながら大学院で研究もしてっていうことをやってました。2000年のシドニーオリンピックと2004年のアテネオリンピックで三段跳びで出場して、30代前半まで競技はやってました。

さ) いま思うと、そういう人とかうして話せてるっていうのは、いまさらですが、すごいことですね(笑)。

小西(こ) それは、星稜のスポーツならではですね。

さ) なんかつごく感動したわ、いま…。

す) で、修士を出て、数年間はミキハウスで

[†] yasaki@seiryu-u.ac.jp (Liberal Arts and Sciences, Kanazawa Seiryu University)

[‡] konishik@seiryu-u.ac.jp (Liberal Arts and Sciences, Kanazawa Seiryu University)

[§] sugi@seiryu-u.ac.jp (Faculty of Human Sciences, Kanazawa Seiryu University)

競技をしてました。けども、そこに少し限界を感じて、大学院の博士課程に入り直して、満期退学にはなってしまいましたが、そこではコーチング・トレーニング論という分野で、やったのはトレーニング方法論とも言いますが、パフォーマンスを上げるためにどういうトレーニングのやり方をすればいいのかを研究するところで、跳びじゃなくて走りの研究をしてました。足を速くするためにどういうトレーニングをするかということですね。具体的には、努力度という主観的なものを使っていて、例えば、全力を努力度100%としたときに80%の力で走ると、動きやスピードといった客観的なパフォーマンスがどのように変わるか、どういう対応関係にあるかっていうことを研究してました。

さ) あ、それ、心理学的にもおもしろいですね。それって努力度をどう変えるとどんなふうに走りコントロールできたり、トレーニングにも役立てられたりできるかとかいうようなことですかね？

す) はい、どれだけ動きを変えられるかということについて、何パーセント以上が現実的に全力の動きに近いかというようなことですね。70%くらいになると現実離れた動きになってしまうので、80%以上の感じで走らないと足を速くする動きにはならないとかですね。

さ) その話もっと聞きたいところなんですけど... (笑)。

す) はい、そういうような研究をしていました。その研究のきっかけは、陸上っていっぱい走るんですけど、100%で走ってという機会って実はあんまりないんですよ⁽¹⁾。

全員(全) へえーっ。

す) ほとんどはサブマックス、90とか80とかで、あるいはもっと落としてたくさん練習やるんですよ。ホントの全力っていうのはときどきにしかやらないんですよ。

さ) それって実際にはどっちのやり方のほうがイイんですか？

す) その割合を研究するっていうのがテーマになってますね。ただ、全部全力っていうのは、明らかによくないです。緊張したり、動きが悪くなったり、ケガのリスクがあったりということで良いバランスの割合っていうのを探してたわけです。で、その博士課程に行ってる間に本学のスポーツ学科が立ち上がるということになって、途中でこっちに来たのが2007年でした。いろんなものを引きずってきたわけです。博士課程も、競技者としても、そしてこっちにきて指導者としてもということになりますね。32歳だったと思います。

2. スポーツと教養の接点

す) いま、学生の変化というところを感じていて、どう捉えていけばいいかっていうところを話しあっていますね。差ができていうよりは、態度が違ってきているということですかね。スポーツをあんまりやらない子も増えてきてるんですよ。スポーツ学科なのにですね。部活動に入って一所懸命やるとかではなくて、スポーツは好きだけれどもやってないっていうね。そういう学生が中心になりつつあるかなっていう予感もあるんですよ。その点を考えて、スポーツスポーツっていうのでいったほうがいいんじゃないかって思っているんです。そういうキャラのほうがスポーツ学科としてはふさわしいんじゃないかと思っています。スポーツ科学とかいうよりも、ですね。元気な学生がいて、現場でしっかり学んで、社会に生かしていけるような力を持っているというようなイメージのほうがいいんじゃないかなって思ってます。それがいまはちょっと過渡的なところがあって、初年次教育なんかも含めて、どうやっていこうかなっていうのがありますね。他の学部や学科

の方から見たときにどんな感じなのかわかんないんですけどね, 印象とか。

さ) ボクらの教養教育科目ですら, スポーツ学科とこども学科の学生たちはほとんど受けに来ないからね。

こ) スポーツ学科の子たちはいても2, 3人だったりするんで, 実際に学生たちに出会うことは少ないですね。能登の祭り⁽²⁾では, スポーツ学科の子たちには出会ったりするんですけど, 大学の中ではそんなに接する機会は少ないんですよ。いまのお話だと昔の体育会系のイメージとは違ってきてるってことなんですよ。

す) 昔の体育会系に戻りたいっていうわけではなくって, 新しい時代の体育会系をっていうことですね。

こ) やっぱり競技ベースでやっていってほしいっていうことですかね。

す) スポーツの実践をもっと学生時代にやっておいていいんじゃないかって思ってます。スポーツにもいろいろあって, 見る, する, 支えるっていうね。その見る, 支えるっていうほうにいてしまいがちなんで, せめてこの4年間はするっていうのももうちょっとやっていこうよっていう。そうすると, スポーツで生きていくとかスポーツを重要な部分にして生きていくときの資源がもっと豊かになるんですよ。ちょっと抽象的な言い方になりますけど...

さ) そうというのが教養と合うと思うんですよ。

こ) そうかもしれないんですよ。今回杉林先生をお招きしようと思うキッカケになったのは, 基礎ゼミの共通FD⁽³⁾のときに, 直感的ではあるんですが, スポーツと教養っていうのは合うところがあるんじゃないかっていう話をしたからなんです。もう一つ具体的な背景としては, 前回までの対談の中で, 身体を通じた学びというのはどのような分野でも

重要じゃないかという問題意識が出てきたことです。杉林先生はこれまで競技者としても, 教員としても, 身体の使い方に対して様々な実践をされたり考えたりしてこられたと思うので, 身体を使うということとそこから何を学んでいくのかについてお聞きしたいと考えています。教養教育のような一見身体は関係のない感じがするところでも, 例えば, 言語を身につけるようなときにはアタマで理解しようとするよりもカラダを使って理解する方が身につくんじゃないかという話をこれまでしてきましたので, 身体というのをキーワードにして学びや教養についてお話しできるんじゃないかなと思ったんです。

3. 反復, 分解, 統合における身体化

さ) 身体化って, embodimentっていう言葉があるけど, パソコンとか語学であるとかっていうのだけでなくって, アタマの中で思考がダンスするような, 何回もアタマの中で具体的に繰り返すような, そうすると思のスキルとでもいうんでしょうかね, そうというのが身につくっていうような感覚があるんじゃないかとボクなんかは思ってるんです。例えば, ドリルっていうのがありますよね。あれはそういうような感覚というのを身につけさせるのにもいいわけですよ。そういうのってスポーツの観点から見ても同じようなことがあるんだろうなあーという話をしたことがあるんです。

す) めちゃくちゃありますね!で, ドリルっていうのは, われわれもホント使ってる言葉ですね。スポーツの世界でドリルっていうと, 技術練習のときに, ある課題を取り出してやるっていうことなんです, 例えば幅跳びというものがあるとしたら, その踏み切りの局面とか空中の局面とかいうふうに分割して繰り返しやるっていうのを指してドリルと呼んでいます⁽⁴⁾。

さ) 三段跳びだったら走ってきて一段目踏み切って空中姿勢から着地して二段目踏み切って...っていうふうにですよ。

す) これを、細かく分けようと思っただけでも、要素に分けることができるんです。どこまででも細かく行くんです。で、それをどのように細かくするのか、どこを大事と見るかですね。ソレが選手とコーチのセンスになるんです。際限がないのでね。その点は算数とか漢字のドリルとはちょっと違うのかもしれないですね。

さ) いや、でもお、算数とかでも、同じじゃないですかね。分数の計算だって最初通分ばっかしさせちゃうとかね。

す) ああーそっかそっか。

さ) 分数の足し算だって最初通分させなくちゃならないし、通分のためには分母を合わせるためのかけ算も必要だし、要するに小学校の算数なんかの場合は、小1からずうっと積み上がってきた要素があっちはじめていろんな演算ができるようになるんですからね。国語の漢字でも同じで、部首っていうのやその成り立ちっていうのやね。偏旁やっただけでなく、ハネとかトメとかハライとかって、最近では減点対象じゃないみたいになってきたようだけど、ボクラのときはね、そりゃあ細かかったですよね。まあホントはね、時間があるのならそういった要素の分解とその理解っていうのは必要なかもしれないですよ。

こ) 僕はそういう基本動作を反復していくってということと、最終的にパフォーマンスを発揮するってところとの間に飛躍があると思うんです。要素の反復練習とそれらが統合された形で表現されることとの間に飛躍があると思うんです。さっきセンスとおっしゃいましたが、これがイイ感じだっっていうのを見極めていく感覚がどこかで必要になってくると思うんですが、その辺りは日々のなかで

のように感じておられますか？

す) コレは非常に興味深いところで、さっきも言いましたようにどこを分解して大事とするのかということと同じくらい、分解して高めたものをどうやって統合するかというのも重要で、例えば、よくある失敗としては、ある部分だけを強くして高めると、全体のバランスがくずれてしまっているままのパフォーマンスからすると落ちてしまうっていうことがよくあるんですよ。部分に分けてそれぞれ強化してそれらをくっつけるっていうのはうまくいかないですよ。Aっていうのを分解してサブレベルに落として、もう一回上げたときにAじゃないものができてしまうんですよ。むしろBっていうのを目指さないとうまくいかないっていうようなことがあるんです。これが、大学生あたりはこのBを目指す意識に持っていないとダメなんですよ。陸上競技で言うとかね。それまでは自然と走ってきて、全体としてやってくるんですよ。

さ) なるほど、走ってるーとか飛んでるーとかですね。

す) 中高まではですね、幅跳びにしても、走ってきて飛んで着地するというところでやってくるんですが、知恵がついてくると、それらを分解し始めるんです。でも、それでうまくいかないことも起こるんですよ。それは、全体と部分の関係がうまくいってないということなんですよ。

こ) それは肉体の変化にも関係してるんですか？例えば、フィギュアスケートの選手が15歳のときはトリプルアクセルが跳べていたのに気がついたら飛べなくなってしまうとか、なにか考えすぎて飛べなくなるとかいうのを話としては聞きますけれども、その分解してしまうのとフィジカルな変化は、大学生の時期に同時に起こってくるのでしょうか。

す) フィギュアの場合はもっと小さい頃の話になりますからね。十代前半の頃に4回転飛べたのがその後飛べなくなってしまうということがあると思いますが、陸上の場合、ピークがもう少し遅いので、身体の変化で何かができなくなるということはあんまりないかもしれませんね。動きを変えるとか自ら鍛えて筋肉付けすぎるとか付け方がワルいとか、そういうことでバランスを崩すことはよくありますね。

4. 教える側と学ぶ側

4.1. コーチの役割と勘—言語化の外で⁽⁵⁾—

こ) コーチとしてはそのバランスを見てやるのが大きな仕事になるんですか？

す) コーチは、選手がやるパフォーマンスをその場で見て一瞬で見抜かないとイケないんですよ。コレはココに原因があるとかいうのを見抜いて、で、それはもうほとんど勘なんですけどね。で、この部分を強調してやるとかを意識させることで全体の通りがよくなるとかをその場でやらなくちゃなんないんですよ。それがむずかしくもありおもしろいところですね。

さ) それは勘なんですか!?

す) これは私あえて勘といってるんですけど、なかなかこれが...

さ) 言語化できない？

す) ...全部はできない、と思ってますね。もちろん勘と言ってもいままでの経験と研究といろんなものがあつた上でぼんっと出てくるものなのでね。なにもないところからはでてこないですよ。

こ) その勘という言い回しがよくわかる感じがするのは、例えば、レポートを採点するときにはまずいレポートはすぐわかるんですよ。一字一句読まなくとも全体としてよくまとまっているとかよくわかっているなどというのはわりと直感でわかるんですよ。もち

ろんそのあと詳しく読みますけれども、その直感あまり外れることがない。それはたぶん自分がいままでやってきた経験に照らし合わせて判断してるんだらうなっていうことで、そうしたプロセスはループリックとかで言語化するのが難しい部分のような気がします。

す) むしろ、その、勘を信じれなくなったら、選手もコーチも終わりなんですよ。そのときにマニュアルっていうのはないので、でも言わなければならないっていう緊迫した状況なんですよ、コーチングの場面っていうのは...。そこでは、出てきたものを信じてやるしかないんですよ。それを磨くということです。パターン化してこういうときはこうっていうのがアタマの中に千個あつたとしても、でもいまいちゃと思うんですよ。その瞬間のものを見抜くなくなっていくのこっちはしていかなくてはならなくて...

—中略—

たぶん、私がトップレベルの選手と話している会話というのは、お二人にはわかってもらえないように思います。わけがわからなくて...。そのレベルに達している選手とコーチでしかわからない会話というのがあるんです。他の選手ではわからなかったりもすると思うんです。でも、こっちではアリアリとわかっていて、そういうところまでいくと...、なんと表現していいかわかんないですが、この世界は... (笑)。

さ) しかもそれは、すごく難しい言葉を交わしているというのではないんですよ。簡単な言葉で簡単なことを話しているように見えるけれども、その選手とコーチとの間では非常に高度なことを話していることになっている、ということなんでしょうね。

す) そうです、なっているんです。

さ) それは学者同士の会話でも同じかもしらへんね。

こ) 学者同士の場合だと、前提となっているところをぜんぶすつとばしたところで話をしているというところがあるから、例えば前の対談でも、僕は文化人類学が専門ですが、専門的になればなるほど会話の中に文化という言葉はでてこなくなるという話をしました。つまり、文化とか社会という言葉が専門的な会話になればなるほど安易に使えなくなる。前提となる概念や理論というのを踏まえた上での会話になるから、端から見ればまさにわけがわからない会話をしていることになるんですね。その点で、学問とスポーツはともに一つのことについて徹底的に突き詰めて研ぎ澄ましているものがあるからこそ見えてくるものがあるということでしょうね。

4.2. 選手から指導者へ—モデル化と指導論の隔たり—

こ) 先生は選手から指導者になられたときに何か新しい意識が出てきたというような変化はあったんでしょうか？

す) 苦労したんです。指導し始めてから...。30歳前半まで競技をやってまして、競技をやってる途中でこの大学に教員として来て、数年間は競技をやりつつコーチもして、そして大学の仕事もするという状態だったんですけども、いまはまあ選手はやってないので指導のほうに専念してるんですが、最初苦労したというのは、自分ができていたこと、できていることがよくわからなかったということなんです。できるんですけど、それがうまく伝えられない、説明できないということですね。できることとわかってることとの間にかなり差があったんですよ。それを埋めている途中です、いまも...。10年くらいになるんですけど、これを埋める作業をずうっとしてきて、最近やっと、ああこういうことだったんだなあ、ってわかるようにというか、それであの時失敗したんだなとかというのがわかってきてます。で、わかってくると、指導にも

それが生きてきて、いまは、10年前とは全く違う指導の仕方をしてますね。で、いまのほうがイイと思ってます。

さ) そういうのの具体的なケースって思い出せるのありますか？

す) 三段跳びって三回飛ぶんですが、いわゆるホップステップジャンプのホップにあたる1回目の飛び出し方が、ずっと違うやりかたをやってたんです。

さ) 違うっていうのはどういう意味ですか？

す) 極端に言うと、カラダの右側を使わなければならないのに、左側を使っていたということなんです。

さ) それってずいぶん大きな違いに聞こえますね。

す) 専門的な話になりますが、私の場合は最初右から踏み切るので、右右左というふうに踏み切っていきます。で、最初の踏切で左側を前に出すような踏切をしてカラダをナナメから入るような踏切をしていたんです。当時そのように指導もされていたし、自分でもイイと思っていたんです。ところがこれが間違いだったんです。右側で踏み切るときに右側を出していかなければならなかったんです。実はこれ、競技生活の後半に、もしかするとそうじゃないかってピンときてたんですが、確信がなかなか持たなくて、引退して指導したりいろんなのを見てるうちに確信したという経緯ですね。

さ) あの—なんとか走りみたいなのと同じような話に聞こえますね。

す) ナンバ走りですね。はやりましたね。ああいうのもヒントになって、右と左っていうかなり大きな違いですからね。ただ、これは、バイオメカニクスの的に研究すると、走りはそのようになってますね。だから、後で裏付けられたところがあって、研究結果を見るとやっぱそうだよなっていうのがあって、

それで確信が持てたっていうのもあります。そういうのが、トップの選手になればなるほど、先にできちゃう人たちはそういう経験があるんじゃないかと思います。自分の勘というか感覚が後で裏付けられるというようなことがあるんじゃないかと思いますね。このような順番というかそういうのがスポーツの中ではあるのでおもしろいなって思います。わかっているとか知ってわかるんじゃないかとまずできちゃうっていうね。

さ) そうですよ、ちっちゃいときから足の速いやツって自分でなんで速いのかかわらないで走ってますよね。

す) 本人もよくわかってないと思います。

こ) おもしろいですね。科学的な分析をしてメカニズムがわかって、それをすぐに現場にフィードバックできるというわけではないというところですね。理屈がわかったからといって、それをそのまま教えてうまくいくかどうかという問題もあると思いますね。

す) ありますね。そこはまた大きな壁があると思ってまして、こう動いたほうがイイよってようなモデルが出たりしますよね。でも教え方はまた違うので、教え方はその方法論、指導論というところで、これは私が興味があって研究対象としているところです。ソコはもう一つ要りますね。目指すモデルと実際どう教えるかというのは大きな課題だと思いますね。

4.3. 師匠と弟子—相似形を成す—

す) そこで言うと、スポーツの上達するときの段階として、いまは教員と学生とか教員と選手とかコーチと選手という立場ですけども、師匠と弟子というような関係性というようなのがキーワードになっている気がしています。例えば、弟子というのは、師匠になりきって見習っていくんですよね。師匠の感じっていうのを自分のものとして取り込んでいくことをずっと繰り返して行って、師匠の

ものが弟子のほうに移ってくるということになると思うんです。その感覚というのとでも重要だなと思っていて、でも、学校の教室という場面ではなかなかそういうふうにはならないんですが、すくなくともスポーツの場面では、その感覚がありますね。

さ) 大学院なんかだと指導教員のクセとか考え方とかツツ込みどころとか日頃の口癖を真似することで、同じような考え方とか同じような批判的態度になってくとかいうのはあるけれど、学部のレベルでそういう感じというのができるというかやっちゃってしまってる学生がいたらうれしくなりますね。

す) ゼミでいうと、文章を何度もやり取りしてるとか、ずっと同じ空間にいて話し合うとか、そういうことを何度も繰り返していくことでなんとなく師匠の考え方とか指導教員の考え方がわかってきて、文章書くときでもこう書いたら指導教員ならわかってくれるだろうな、これ怒られるかなとかわかって、言ってみれば価値観を取り込んでやっているとということになりますね。そうなるって真似が進みますよね、そして自分のものにできるというか。

さ) 短大なんかだとね、なかなか文章っていうところまではいかないんですが、ある種の感性のようなのは似てくるというかそういうのはありますね。卒業してからでもボクの好きそうな場面や状況やモノの写真を送ってきてくれるようになる子もいるんですね。そういうときはちょっとはゼミやって良かったなって感じます。感性とかアフォーダンスのようなのが概念として理解するだけじゃなくて、実体験とか肌感覚でわかるようになってくれたとなれば、少しはなにかの役に立てたかなという風にも思えますからね。

す) スポーツのチームなんかでも、動きが特徴的であったりして、選手を見たら何県の選手かなっていうのがわかるようになると

か、誰だれが教えてるんだらうなっていうのとか、人の動きを見ているとわかることがあって、それはもうその選手が取り込んだんでしょね。まあ形にはめられてるのかっていうこともあるかもしれませんが、そうでないような特徴というのがあったりもします。

こ) それは文化人類学的にもおもしろいですね。スポーツにおけるチーム文化というかそういうのがあるんですね。

す) 私も自分のコーチの動きと相当似てると思います。私が指導した三段跳びの選手も、似てきたなあ、っていうのがありますね(笑)。

全) (笑)

こ) そうなるとうれしいですね。

す) うれしいです。そんなこと教えたっけなっていうようなこともやってたりしますしね。他のコーチからも言われたことがありますね、動き似てるねって。

4.4. 多様な教員との出会いを増やす

こ) そういう意味でも、一年生のうちにいろんな先生と出会うというのは重要かもしれないですね。せっかくゼミに入るんだから、そのゼミの先生と考え方が合っていると人格的にも合いそうなどこに入るのがベストだと思うけれど、その選択肢がないとなると、時間が無駄になってしまうかもしれないし、その意味でも基礎ゼミでいろんな先生と出会うというのがいいということなんでしょうね⁽⁶⁾。

さ) 最も radical には、毎時間、先生もゼミ生もランダム変わる、というような特徴のあるゼミデザインができるといいなとも思ってるくらいなんです。

す) 毎回シャッフルですか？

さ) そう、毎回。

す) とすると、その日教室のドアを開けるまで誰がいるかわからない(笑)。

さ) うん、そう。例えば、今日はしんみりし

てるなーとか、今日はみんな書く量多いなーとか、今日は女子が多いなーとか、ね(笑)。そういうような授業も大学ならあってもイイと思うんです。そんなのいままで体験したことないでしょう？

す) そうですね。

さ) そういうところまでいけたらね、学生も先生たちもアクティブに学ぶっていうところまでイケると思うんですよ。そうした中で学生たちも友達を作っていったり鍛えられたりっていうことがあると思います。一方で、クラス機能というのがどういう風に担保されるといいのかがね、難しいわけですけど。

す) たしかに、そのクラス機能が担保された中で学生たちがいろんな先生たちを知るといえるのはいいことだと思いますけどね。

さ) 他の大学でも、おそらく、そういうったクラス機能と大学の自由な学びというのとの両立をどのようにすればよいかということに腐心してるかもしれませんが。ただ、1学年100名に満たないような小さな学科なら、1年も経てば大概はかなりの学生を覚えられちゃいますからね、スポーツやこどもや国際なんかの場合ね⁽⁷⁾。それに比べて経済や経営は難しいでしょう、顔が全部見えませんからね。ボクなんかも前の大学では、1学年が100人いるかないかだったので、1年も経てば8、9割は覚えられちゃいます。同じ学年の同じ子たちを同じ授業で何度も、たいがいは年間通して何かの科目で30回分出会いますからね。理系の場合は特に専門基礎の科目なんかだと同じ顔ぶれが100人くらいで移動するだけなのでね。でも、この大学では、教養教育科目の場合、たとえ100名程度の授業であっても、毎クォータあるいは毎学期違う顔ぶれ、違う学年、違う学科、いりまじりでやってきますからね。専門基礎の科目を教えるのとはわけが違います。だから、全部の顔が見えないというのがボクのいまの悩みで

す。でも、大学の教員にとってもそういった顔が覚えられるとか名前が覚えられるとかいうのはとても大切なように思っています。

5. 失敗と成功の与え方

5.1. 過程としてのエラーの重要性

こ) さきほどのモデル化と指導論に関して、教養に引きつけて考えるなら、例えば基礎ゼミでは読解力をどうやって教えるかという非常に大きな問題があって、つまり、こうすれば読めるよってというのはいろんな教科書に書いてあるんだけど、それをそのまま教えても学生は読めない。でも自分はこれまで研究者としてやってきた中で読む方法は知ってる、読める、でもそれをちゃんと言語化できないし、教科書に則って練習したとしても学生はこの文章を読めてないよなっていうことは生じる。そこんとところに飛躍があるのかなっていうのを聴きながら考えてました。じゃあその教え方っていうのはどうやって積み上げていけばいいのかということですね。どうお考えでしょうか？

す) 経験的には、トライアルアンドエラーを繰り返すしかないと思ってます。

さ) そやねー。

す) 常にこれは正しいはずだと思ってやるんですけどもそれが常に覆られていって、でもそれはそういうもんだというある種の諦めもあって、それを自分で認めながらやっていくという感じですね。

さ) いまの子たちはその一方で、エラーをするということに対して非常に怖がるじゃないですか。ここ10年くらいは特にそういう子たちが増えてきているという風を感じるんですけど、それをどうすればいいかっていうのもありますよね。ボクらもトライアルアンドエラーを繰り返してきて堪え忍んできたというようなのがたくさんあると思うんですが(笑)、そういうのをいまの子たちはやりたく

ないとか、すぐ目標に進みたいとか、それをすぐ教えてほしいという風になる。

す) 最短距離を教えてくださいという感じですよな。

さ) そうそうそう。それをすぐに役に立つ、という風に思ってしまうというようなことがある。そこはじゃあどうやったらエラーというのを怖がらなくなったりするんでしょうね。もちろんそのプロセス自体もトライアルアンドエラーなんですよけれどもね。エラーを怖がらない、エラーをしてもだいじょぶだよ、というのは、実は大学っていうところはそういう環境を作らなくちゃなあって教養なんかから見ると必要に思いますが、ご担当のゼミとか科目とかでどのように感じておられますか？

す) これは、スポーツというのがそもそもエラーの連続っていうのがあって、これがスポーツが教育ツールとして優れている点だと思うんですよ。やればやるほどもうエラーばっかりというね。うまくいくとか完璧っていうものはなかなかないですよな。常に何かのエラーをもってパフォーマンスをするものなので、それがスポーツの世界ではふつうなんですよな。さっきまでは指導者としてトライアルアンドエラーしてますってことでしたが、選手としても学生としても常にそれに曝されてますね。

こ) なるほど、座学の場合は、エラーを恐れたら動かないという選択ができるけれど、スポーツの場合は動くところからしか始められないので...

す) まずは動かないといけないので、そこがいいんですよな。

5.2. エラーと心の管理

さ) 現在検討中のオムニバス形式のゼミナール⁽⁸⁾っていうのは、ボクなんかは実はそれをイメージしていて、リーディング、ディスカッション、ライティング、プレゼンター

ションというような基本的な横串を複数担当者でそれぞれのテーマという縦串で3ないし4クール繰り返せば、そのテーマの内容や方法だけでなく、大学での学びや学び方というのはこういうことなんだなという、いわゆる心理学ではスキーマという概念がありますが、大学スキーマとか、大学での学びスキーマであるとか、そういったことがわかるようになるんじゃないかなというのが真のねらいなんです。

す) なるほど、それは、非常にスポーツ的な感覚と近いものがあるかもしれませんね。スポーツの場合、エラーと、そして、負け、これが重なるんです。みんなうまくいくことと勝ちたいっていう風にやるんですけど、これがうまくいかなくて、ふつうは失敗と負けの連続なわけです。それをどう受け入れてどうコントロールするかというのが大事で、これがうまくいくと、競技者としてもうまくなりますから、そのマネジメントですね。

さ) そうか、だから、人間としても同じことが言えて、負けをどのように受け入れるかとか、エラーをどのように改善しようとするかとか、自分自身の心の管理、ですね。

す) そうですね。だから、このへんをすぐに、そして生々しく学べるというのがスポーツのイイところなんですよ。

さ) しかもアクティブだしなあ。

こ) なるほど。じゃあコーチングの技術の中に負けに対するケアも含まれてくるっていうことですね。

す) そうですね。

こ) そういったメソッドは研究されてきているのですか？

す) これは....、たぶんされてきてるんだろうと思いますけれども、私の場合は、私の経験上からのものということになりますね。いま指導している経験から、あるいはされてきた経験からですね。ただいづれにしても、負け

たときとか失敗したときが重要だと思いますね。勝ったときとかいいときは何もしないですからね。

さ) そうなんですよ、だから、よく成功体験たくさんさせたいっていう教員わりと多くおられるんですけど、ボクそれそんなに必要かなあっていうところがあります。むしろネガティブな方をどれだけか経験させられないと、社会に出てからはネガティブなことの方がずっとずっと多いんだから、そこには耐性と言いますか、最近の言葉でいえばレジリエンスも含めてですけど、さっきの先生のことばでいうと管理、マネジメントも学んでほしいなっていうね。ほめるほめるだけではどうかなあっていうのがありますが、どうですか？

す) 成功体験も必要だと思いますけど、ソコを目指しつつ、でも現実を見るとそんなにうまいことはいかないというのがあって、より大部分の失敗や負けの部分をちゃんと対応していけないといけません。

5.3. 過去のエラーを開示する

さ) ゼミ生たちに曲がりなりにも研究というようなことをさせるときに、これ調べてみー、って言うて、そんななかったー、とか、こんなやってみー、って言うて、そんなできひんかったー、とかって言うてくると、そういうのをもっとたくさんさせながらテーマに沿った課題をやらせていくんですけど、その中で失敗してもできなくてもやれなくてもなんとか報告しようとしてくる子たちは将来も伸びていってくれると確信してるんです。そうじゃない子たちは、さっきの話のように最短を目指したい子たちなので、例えばいきなりどうやったらアンケートって作れるんですか、って来るんですよ。でもさ、そこを考えてくれって言うてるやん、そこはオレが考えることじゃないでしょ、って言うてるのにね。キミがうまくできなくてまずは

作ってごらんって言うようにしてるんですけどね。んで、予備調査としてやってみたらまた次のことがわかるようになるとか次のステップがあるからって言うんですけど、いきなり最終ステップを踏もうとする。で、そういう子たちは、先生何からやっていいかわかりません、って言うてくることになる。できない子たちとかやらない子たちって言うほうが正しいかなあ、そういう子に限って特にそういう姿勢になってしまっているっていうのはありますね。

す) たしかにありますね。私もゼミでの卒論指導なんかでは、そのへんを応用して、佐々木先生がおっしゃったように、やってわかんなかったときにやっとならぶので、そうすると次の課題もできるようになるんですよ。

さ) そうなんですよ、それを待ちたいんですよ。それを「待てる」教員でいつまでもいたいなあって思ってるんです。もちろん、待って待って2月になってもう時間切れという研究ももちろんあるんですけど、まあ短大の場合は2年までしかないので、途中は途中で報告書を書いて、将来10年ビジョンってことで、また考えたり調べたりする機会がきつとやって来るかもしれないからねってことにしています。

す) 卒論生だって卒論書いたときにやっとならぶ書き方がわかりましたっていうことが多いですよ。いまだったらもうちょっとイイの書ける気がしますとかね。

さ) 卒業してからやってきたときにもね、結局私の卒業研究ってこういうことだったんですかねえ、って言えるようになるもんね。あのときはなにやってるかよくわからなかったとかね。

す) そうですね、そのときは形はなんとかするけど、っていう感じですよ。

さ) まあボクらでもそうでしたよね、卒論でも修論でも博論でも、「あとがき」を書いて

るときにやっとならぶということかあっていうね(笑)。

す) そうそう、それで、しまったあ、とかね(笑)。

こ) 後から訂正したくなるとかね(笑)。

す) さっきの私の教員経験のと同じようなところがあって、まあ一生懸命ですからねやっとならぶときは、次の試合勝ちたい勝ちたいってずっとやってるんですよ、なんせ勝てれば良いのでね。だからまずはやっていくっていうわけなんですけれど、でも、いま、恥ずかしくなったりしてます(笑)。しまった一っとならぶ。

さ) ちょっとあのままで行きすぎたなあーとかね。

す) 昔は間違った指導してたなとかもね。でもそこは平気で言うようにしてますね。去年は違った教え方してた。ごめんな、って言うようにして。ソコは堂々と言えるようになってもいいんじゃないかって思いますね。

さ) うん、そっか、ボクらもそのトライアルアンドエラーを繰り返してるわけだから、それはちゃんと言えないとダメですよ。

こ) それが言えてこそその大学教育だって感じがしますよね。

さ) うん、ホンマやなあ...

こ) こっちもエラーを繰り返しているっていうことを学生にもわかってもらおうとか。先生っていうと完璧できると思われかねないんだけど、実は先生たち自身もトライアルアンドエラーしてるからキミたちもおなじように失敗したりして頑張ってくれよっていうところはあるし...

さ) そういうのも1年次ゼミでわかってもらおう必要はありそうですね(笑)。

す) わかってもらいたいですね(笑)。

さ) そういうのもね、先生が変わって担当することで、あっちの先生はこうだったけどこっちの先生はこうだっていうようなことを

経験して、やっぱりみんなそれぞれ多様なんだよねあっていうことがわかってくれればね…。

す) …お互いイイですよ。で、そういうスタイルになってから、だいぶ楽になりましたよね。それに、新しいことを学ぶっていうことに対して抵抗がなくなりますからね。学生たちはまた違ったこと言い始めたぞっていう風にみるんだらうと思うんですけど、わるいか、ってね(笑)。

さ) うん、例えば、教壇の上で、ちょっと自分が恥ずかしいことができるかとか言えるかっていうのもけっこう大事かなって思ってるんですよ

す) ああー。

—中略—

5.4. 成功体験と課題の出し方

こ) スポーツ選手と同じように、研究者もアカデミックなところでは常に勝たないといけないという状態に置かれていて、院生のときは指導教員とも真剣勝負だし、論文を出すとなれば雑誌のレフェリーと戦うということで、やれ論文を通せ、やれお金を取ってこい、というようなのとずっと戦い続けてるようなことになるんだけど、実際自分が学生を教える立場に立つとそれだけでは回らなくなります。だからそこで一つステップというか階段の踊り場に来てちょっとスタイルを変えてみるということになるのかもしれないですね。さっきまでのお話でキーワードになると思ったのは、「自信」だと思います。例えば、人文学部の学生に留学前の抱負を書かせると、みんな自信を付けたいとか自信を付けて帰ってきたいとか書くんですよ。そんなにみんな自信ないのかって思うんですけど、だからといって根拠のない自信に満ちあふれていても何かができるとは限らないわけで、本当の自信とは成功や失敗を含めた多様な経験から出てくる気がするんです。杉林先

生にとって自信とはどのようなものでしょうか？

す) これはちょっと成功体験が少しでもないともてないようなのが自信でしょうねえ。そういう意味では、何が何でも最初は成功させてしまうっていうのが一つのアプローチとしてはアリかなと思ってるんですよ。最初はまずむちゃくちゃなやり方でいいんですけどもとにかく成果を出させる、勝たせる、後押しいっぱいして、本人どこまでやってんだっていうくらいでもいいんですけども、とにかく成果を出させると、成果が出ると自信がついて見方が変わるんですよ。俯瞰して見れるようになったりとか。成果を出さないと見えないことが見えてくるというようなですね。まずは一回でも成果を出させるということですね。それはゼミでもそうですし、スポーツのコーチングでもそうですけども、最初はその優しさが一つ大事かなって思います。いろんなことをこっちが耐えながらガマンしながら、まずは一回めっちゃお膳立てして、結果を出してもらおう、っていうそこから始まるということですね。

さ) スポーツとかだと速く走らせてみるとか、長く飛ばさせてみるとか何かできそうに思えるんですけど、ゼミとかではどのようなことがあてはまりそうですか？

す) 学生に応じたちょっと苦しいけど頑張ればできるというようなのをやってもらおうということですかね。

さ) 例えばどんなのですか？

す) 例えば3年生だと、画像を使った動作分析ですね。カメラ2台で人が動いているのを撮影して、それを三次元の座標に戻してどれくらいの速さで走ってるとか角度がどうなってるとかを分析させるんです。そういうのをやらせて、じっくり丁寧にやればできる課題なんですよ。もちろん、その課題は深みもあるんです。例えば、重心を求めてみるとか

重心の速度を求めてみるとか、やろうと思えばいくらでも深く分析できるんですけど、その深さをどこまでやろうかっていうところですね。まあそのちょうどいい課題を設定して、しかもその本人が興味を持つようなスポーツを対象にするとかして、最初はなんとか辿り着けるようなのを一回やらせるようにして、その後にはちょっときつい課題が与えられるようにしてます。一回到達したという経験があるとできるようになるんじゃないかと思ってます。

さ) 逆に一番きついと思われる課題というのはどんなのですか？

す) これはあ、極端にいうと、いいのもってきて、とか、おもしろいを見せて、とか、一番いいかげんな言い方の課題です(笑)。

さ) ああそれね、むつかしいね。ウチのゼミなんかはそういう感じのばかりやから... (笑)。

す) これ究極なんですよ。

こ) それ基礎ゼミでやりがちなんで、よくないなってね... (笑)。

さ) そうそう、ボクら二人ともそういうのやりがちなんですよ(笑)。どうしてもプロセス見たいから、こっちからdirectionすることはなくて、いちばんイイと思うの持って来てっていうのはよく言いますね。一番感動したのとか日常で不思議に思った映像とか写真持って来てとかいうのが課題だったりしますから、みんな最初は目を丸くしてしまうんですね。なので、ボクが例えばもってくるとするとこういうのね、ってみんなに見せて、どう考えたりどう見たりするんやって問うんですよ。そうすると、最初は、なんだそんなんでいいのかって言う子たちも出てくるんですけど、ホンマにそんなんで議論できるとおもってるんやな、っていうふうに負荷はかけておくことにしてます。たしかに、オリジナリティとか自分を開示するようなモノやコト

なんかのように、自分のuniqueさを出すような課題のものはいまの子たちはすごく不得意やね。

す) その、オープンなクエスチョンを出すときにはすごく難しくって、だからそれを目標にしていますね。

さ) そう、だから、自分で設定しなさい、って言うんですけど、それができない子たちがたくさんいるので、設定する力、フレームワークを自分で作るチカラっていう、ホントはそういうのがほしいんですよ。短大の場合は2年しかないのになかなかむずかしいですけど、大学のように3、4年あるとね、すこしはおもしろく自分を設定できるようになっていくかもしれませんね。

6. 真似して盗む

6.1. 自らの修正と真似のセンス

こ) そのステップを突破するには何が必要かっていう、つまり、スポーツで例えるとさっきの話に戻りますが、それぞれの動作を身につけてある程度うまくなった人といわゆるトップレベルの人との間には何らかの飛躍があると思って、例えば決められた課題をこなすんじゃなくて自分で課題を設定していくっていうのがきつとあるんだと思うんですけど、実際競技の中ではどういう課題がでてくるものなんですか？マニュアル化されることを超えたレベルでは、ご自身のなかでどのようなことがありましたか？

す) 課題というのは無限にあるんですが、ホントどこを見るかなんですけれど、僕のわるいクセでもあるんですが、センスで片付けてしまうところがあって、まあそれを見極める、無限ですからねやっぱ。ただ、無限といつつもその時々トレンドというのがあって、まあナンバ走りもそうですけれど、あれがはやったところがあって、そのときはみんなナンバのほうにいたり、いまはまたち

がうのがあったり、っていうのがあって、そういうのもやっぱりかじりますからね。もちろん過去の経験や体験を土台にして課題というのは出てくるので、どうやって課題を見つけるのかと言われると、自分でもよくわからないですね。

こ) 例えばでも、トップ3の人たちのまねをするということではないんでしょう？

す) あ、でもそれはあります。

こ) あ、あるんですね。そのまねをしたから、その走りができるようになるのか、さらにその先にオリジナリティをどう出すかっていうことが気になっていて、つまり、まねをすればトップ3の選手と同じ動きができるようになるなら誰も苦勞はしないと思うんですが、そこでやっぱりセンスが登場することになるんでしょうか？

す) 課題というのはいろいろあって、その中に、自分を修正するっていう課題もあります。明らかに何かがよくないときには、それを修正するという方向で課題を見つけるんですけども、もういっこの方向は誰かのまねをするという課題で、モデルとなる人の物真似で、それをやるっていうのは、かなり、よくやることです。それはイイとされているやりかたですね。

さ) 効果的？

す) そうですね。で、そのモデル、この場合はある誰かですが、それを目指して、そして修正しなければならぬときには自分で課題を見つけ出していくんですけども、そのときの世界チャンピオンとかの跳躍はひたすらたくさん見ますね。見て、盗もうとして、マネをします。

さ) めっちゃ違うもんなんですか？

す) 違いますし、同じところもありますし、人によっても違うんで…。

—中略—

す) 自分のレベルが上がってくるとまた見え

るものが違ってくるんですね。

6.2. 教わることと盗むこと

こ) いまの話でおもしろいと思うのは、なにかを教わるんじゃなくて盗む方が定着するんじゃないかっていうことですね。少し文脈が違いますが、僕が大学院生のときは先生や先輩のやり方を盗めという考え方がありました。プレゼンのやり方にしても論文の書き方にしても良いとこあったら盗むっていうね。教えてもらえないからっていうのもありますが…。盗むっていうのは単なるコピーをしようというのではなくて、自分なりに解釈して自分に身につけやすいようにして取り込むというプロセスだと思うんですね。だから単なるコピーではなくて自分なりにカスタマイズして無意識のうちにやっているとありますよね。ただ、いまの教育の中では、教える内容をパッケージ化してこれをやるとこれが身につきますよというようなものを提供するところに重きが置かれていると思うんです。教員のほうがオレが勝手にやるから勝手に盗んでいけというような教え方はなかなかできないんじゃないかなと思いますね。杉林先生は学生たちにとりあえず盗めそうなのは盗めっていうように伝えることはありますか？

す) あります。一番最高なのは自分から盗んでもらうことですね。だからこちらもある程度の身体の動きはできるように常に整えておかないといけないんです。もちろん現役時代ほどのスピードとかパワーはないんですけど、模倣はできるという状況にはしておかなければいけないなと思ってます。そして模倣のチカラは、現役の頃よりもうまいかもしれません。ココを見るんだよっていうようなやりかたでね。師範ができるというのは訓練してるつもりで、ソコはとても大事ですね。やっぱり生で見るというのは一番いろんな情報がきますからね。ビデオもいいんですけども。

さ) 「情報リテラシー」⁹⁾なんかでよく受講生たちに言ってるのは、ボクの動かしてるマウスポインタの動きとか選択の仕方とかを見ておくようにということですね。ボク自身も操作の中でいろんなショートカットを無意識の中でやってることがあるんですね。で、自分の授業だけでなく、他の先生たちの授業でもプレゼンされたりパソコンの操作をされたりするときに、ふつうにスライドをめくってるときだけじゃなくって、先生がもたもたされてるときとか失敗されてるときとか、そういうのをよーく観察するようにするといひよって言ってます。そういう他の人のやってるのを見て、何を知ってないとそれができないのかとか、どういう風に解決すればいいのかっていうようなことがわかるようになるからねってね。授業中とかゼミ中に何気ない時間であっても注意して観察するようにするといひですよってね。つまり、授業中の行間に当たるようなところでも、ずっと見てる、つまり観察してるとイイと思うんです。学生たちにはもっと人のやることを観察して、自分との関係がどうであるのかっていうのを考えられるようになっていってほしいと思います。そういうのを学ぶとか真似るといひか「まねぶ」といひかかってのを大学のときにはやってくれるとイイなと思います。

す) 学生が教員の何かを盗んでいってもらうっていうところはとても大事だと思っいて、それをやろうと思うと、4年の専門ゼミか部活かっているところではできんですが、なかなか全体ではできなくて、何か条件があるでしょうから、人数の限界があったり、関わる時間が圧倒的に必要なのね。もちろんゼミでやるということになっても全員とそういう関係になれるかというともた難しいところがあります。部分的ですし、まだちょっとそこは残念だなと思っいてるところで何とかしないとあなって思っいてます。もちろ

ん、盗まれるに値する状態っていひのも必要ですが、そういう感覚ってありますか、学生がよく盗んでってくれたなあっていひようなのって。

こ) ありますね。ゼミ生ではないですがよく研究室で話をする学生なんかは、いつの間にか僕の考えが乗り移ったように感じるこたがたまにありますね。んで、ああ、よかったなって、僕自身は思っいます。それはもちろん相性の問題もあるし、全員に対してそういう関係は結べないですけど、まあ、僕がこれまでやってきたこたに共感して盗んでいひてくれた子がいるわけで、そこで違っと思った子はまた違っ先生のところでは何かを盗めるかもしれない。だからいろんな先生に出会ったりするっていひのはそういうメリットがあるでしょうといひことですね。まあおっしゃったように、盗まれるにふさわしい人にならないといひけないなあっていひプレッシャーはありますね。

7. モードをめぐる

7.1. モードのスイッチング

す) ココまでの話といひのはコーチとしての立場の話が多かったと思っいますが、まあ、いろんな立場があまして、もちろん、研究といひ立場であるとか、教育とか、含まれるかもしれませんが、コーチと、あとコーチとあっても本学の学生を指導する立場と、日本陸連のトップ選手を見てるっていひ立場ですね。オリンピック強化指定選手を見るといひことです。で、昨日までちょうど日本陸連の強化合宿をやってまして、鹿児島に行って、東京オリンピックを目指すような選手を指導してきました。それと、日本アンチドーピング機構といひところのアスリート委員といひのをしっていまして、アンチドーピングの教育とか啓発といひのものにも関わっいてます。それも定期的に活動があって、そういうこたをご

ちゃごちゃってやっていますね。その中で研究のネタが出てきたり、研究のことを現場に生かすようなというようなことをしていますね。非常にとりとめのないような日々を追われている感じではありますけどね。

さ) この大学の学生たちに関わるときとトップ選手たちと関わるときって先生自身の態度ってというのはどういう風に変わるんですか？

す) 以前は違ったんですよ。競技レベルがまず違うので、感覚も違うので、モードをばちっと変えないとできなかったんですよ。だから、陸連の選手を見て帰ってきてまた行ってっていうのを繰り返していると、ものすごく疲れるんですよ。

さ) それはスイッチングに疲れるということですか？

す) そうです、スイッチングに疲れてたんですよ。でも、最近、同じようにスイッチできるようになって…。

さ) それはどっちに合わせるんですか？

す) それが、わかんないです。ただこれは最近感じることなんですけどね。以前は明らかに変えてたんですよ。どっちかっていうと帰ってきて本学の選手たちに教えてるときがなんとなく疲れてたんですよ。トップレベルの選手を見てからそうじゃない選手を見たときにスイッチするのがたいへんだっただです。でも最近なんか共通のスイッチができて、いいのかわるいのかわかんないんですけどね。

さ) それって、例えば、ボクらが日頃の学生たちのレポートとか課題とか見るときと、学会とか行って研究者たちと話してきたときのような、あの、ギャップ、ですかね？

す) そうそうそう、そうですね。

さ) こっちに帰ってきてガックリするみたいなね。レポートとかここから直さんならんのか、というようなときとかね。

す) そんな感じですね。これがいまは変わらなくなってきたというのがある…。

さ) それ、なんででしょうね、ボクも実は最近そういう風に感じることもなんですよね。アレは誰がおっしゃっていたか思い出せませんが、学生たちを見てるときもなんとなくわかってやれるようになってきましたよ、ってね。

全) (大笑)

さ) 文章がね、むちゃくちゃでもね…。

す) わかってやれるようになった。なるほど、そういうことですか。

さ) うん、こっちがね。むかしはね、なんだかんだといちいち問い直さないといけない自分がいたんですけど、つまり、いちいち添削して返さんならんって思い込んでた自分がいて、いちいち文を質すようにしていたんですけど、例えば短大の1年次春休みは十日報っていう10のつく日にそこまでの10日間に会った人、モノ、コト、あるいは自分の考えたり感じたりしたことを1ページに書いて提出するっていうのを課題にしてるんですけど、それに赤を入れなくなったんですよ⁽¹⁰⁾。で、いま翻って考えると、見る時間も短くなってきてるなって思ってた、それはたぶんさっき話した、わかってやれるようになった、ってことなんじゃないかなってね。ホントは直したいところいっぱいあるけれど、あるいは求めたいことはいっぱいあるけれど、自分の想像力とか創造性で補ってしまっちゃってるというかね。まあもちろんライティングという観点からは、教育的配慮は必要なんだけれども、彼らの出力をなんとか理解してやるという意味ではこれでもいいかとね。…これってダメなん!? (笑)

す) 良いのか悪いのか私もちょっとわからないんですが…。

こ) 逆に学会発表を見に行っただけの反応は変わりましたか？

さ) 向こうでは変わらないかなあ…。うーん、あ、でも、変わるといふか、ポスター発表とか一対一で質問できるので多くの時間をそこに割いてるんですが、そのとき、自分の関心のあるテーマで、かつ、自分でもやりたいと思ってもいまはできないというようなときに、そのテーマをその発表者に振ってくることにしてるんですよ。もちろんその発表しておられる研究テーマに関わることをね。こういうのやったらどうですかとか、こういうのボクは知りたいですとか、そういうのを吐き出して帰ってくるようになりました。それと、こうすれば研究がよくなるとか、おもしろそうになるとかというのを言ってきたりっていう、ある種教育モード的な感じもね。

こ) それって、抽象的な言い方ですけど、人格が統合されていくプロセスなんですか。僕はまだその境地まで至っていないんですが、この大学に着任して4年目ですけども、教員をやっていると、研究者としての自分と教員としての自分をどう折り合いを付けるか、というのに悩む時があります。僕自身の狭い専門としてはチベットのとある宗教で、世界で20人くらい、日本で3人くらいしかやってないような超マイナーな分野をやってるので、それだけを授業で教え続けるわけにはいかないわけで、教育向けのコンテンツをいろいろ考えてやるわけです。ですから、専門の論文を書いているときの自分と基礎ゼミをもっているときの自分とが完全に分裂してるんです(笑)。それが自分の中で折り合いがついてくると、そのモードの切替をしなくていいんじゃないかな、統合されてくるのかなっていうふうにもいまのお話を聞きました。

す) そうなんですかねー。

7.2. 言語と身体モード

こ) 前の対談で、語学は単に単語を覚えるだ

けじゃなくって、話してるその人の振る舞いを真似ることが実は一番の勉強になるというのがありました。例えば、僕は、中国語に一番親しんでますが、中国語って声の大きさとかしゃべるときのジェスチャーとかが全く日本語と違うんです。日本語と同じリズムで言ってもまったくしゃべれないし発音もできないんですけども、そこで中国の人と同じような振る舞いをするのできるっていう感じになるんですよ。これは自分なりにうまくカスタマイズして中国人の動きを取り入れるということによって中国語が上達した感覚があるし、英語でもフランス語でも何語でもそういう感覚があると思いますね。あとはプレゼンとかもそういう側面があるんじゃないかな。

さ) それもある種のモードっていうかね、そういうモードに入っていくという感覚ね。

す) ああーあ。

さ) 小西先生ってば、日本語だとこのようにぼそぼそと静かにお話しされるけど、中国語になるとたいへんなことになるらしいよ(笑)。声でけえーなあーとかね。

全) (笑)

さ) まあ言ってみれば言語モードというか身体表現モードというか、そういうなにかにスイッチが入るということでしょうか？

こ) そうそう、僕は、中国に行くといつも解放された感じになります(笑)。確か杉林先生、上海体育学院に行かれるとか。

す) 10日から行きます。

こ) 中国に行くとコミュニケーションが違うという感じになりませんか？

す) ありますね。私の場合ちょっとまだ慣れてなくて、疲れる感じがあります(笑)。話せないんですけども、エネルギーというかそういうのがしゃべっているのを聞いてるときになんかでしょうね、ちょっと疲れがあります。ただ、慣れるとそこに心地よさが出てき

たりします。

こ) 向こうの人と同じリズムでしゃべるとやはりこれが合理的なんだということがわかりますね。日本語の感覚やリズムでしゃべると、なんとというか息が合わないという感じになりますね。やはりコレはおもしろい話ですね。前回の対談でブローダウェイ先生が言語はダンスだっていう風におっしゃってたんですけど、今日の対談では、言語はスポーツなのかもしれないし、しゃべるといって自体がそうなのかもしれませんね。こうした議論のときのしゃべり方と教壇に立ったときのしゃべり方ってまた違うし…。

7.3. 言語化モードによる教育

さ) その、話は戻って、トップのほうを教えたときのモードっていうのは、どんな感じになるの？

す) ちょっとさっきの話になっちゃうかもしれないんですが、特殊な会話が成り立つということですね。

さ) それで、心地よい？

す) あれは心地良いもんですね。でもこっちはまだそのレベルに至らない選手も多いので。

さ) そうするとこっちは言語化が多いってこと？

す) けっこうですね、言語化とか指示をはっきりさせるとか、目標像をきっちり、それこそ本日のテーマはというようなことをしたほうが伸びる学生が多いので、そうやってますね。

さ) そうなんですよ。だから、そこが、教養的な学びというのと照らしたときにジレンマになるんですよ。例えば、プロセスを与えたいっていうのがある一方で、それにうまく引っかかってくる学生というのはわりと少なく、あれやってこれやってって言うほうが、クイックイって伸びていく感じは強いんですよ。

す) これ、たぶん、いろんな教育現場で起こっていることだと思いますね。同じように、スポーツの現場でも起こってます。やれって言ってやらせたほうがある程度までは伸びることがあるんですね。でもその先つてなると、そうじゃないんですよ。

こ) ではたとえばこっちで教えられているときの方が怖いコーチに見えるときがあるってことですかね？ 厳しい先生っていうか…。

す) あるかもしれませんね。まあ最近では幾分こっちでも柔らかくなってきてるんじゃないかとは思いますが。

さ) 統合されてきてるからね！ (笑)

す) それもありますし、学生の反応も、この人にはどこまで話せばいいんだろうっていうような壁を感じてたんですが、最近はそのような感じでもなくて、もっと自然にコミュニケーションが取れているなというふうに思います。

さ) 単純に先生ご自身が丸くなったっていうのもあるんじゃないですか？

す) それもあると思います (笑)。

さ) もちろん丸くならない方も少なからずおられますけど…。

こ) 丸くならない方が研究者としてのパフォーマンスの高い方というのはときどきおられますからね。

さ) 常にユニークとか。

こ) 常に吠え続けるとか。

す) スポーツ現場はそのせめぎ合いで、かっちりやれって言うか、どこまで自由にするか、ですね。何十人と一斉に指導しなければならない場面が多いんですけども、その場合はやれって言うほうが楽なんですよ。

さ) そうか、対象人数ということもあるか。

こ) どうしてもそういう場合は最大公約数的なのを持って来ないと、特定の何人かに合わせてしまうとそのグループ自体が成り立たなくなってしまうということですね。

8. 学びの過程と結果

8.1. 学びの効率と回り道

す) 学生が意欲と自主性をもって自ら取り組んでいくって理想ですけど、なかなかそうはいかなくて、でも強くさせたい、あるいはまずは高みにのぼらせて、そしてそこから見られる状況にしたいというのがあって、でもそのバランスに私も非常に苦しんでまして、いままでの12年の指導経験で言うと、どんどん、やれって言う部分が増えてきてるんですよ。いいのかわかんないんですけどね。完全にはいかないんですけど。最初は、なんとというか自分の選手経験からすると、自ら課題を決めて、そのプランを立てて取り組んで、そこでまた反省をしてっていうサイクルでやってきたので、それがイイに違いないって思ってたんですけど、それがあまり効率的ではないっていうことになって、なるべく全体をしっかりと伸ばそうとするとある程度こっちで決めなければいけない、ある程度やらせなければいけない、でもどれだけやらせるか、全部やらせるわけにもいかず、全部自主性に任せるわけにもいかず...

こ) それは難しいですねー。でもそれはどの分野にも共通する話で、われわれも教員になる前はそういうスタンスでやってきて、それがイイ方法だと思ってきたけれども、実は他の大多数にはそんなに効果的ではないというか、逆に回り道ばかりして何が得られたのかわからないってような結果になりかねないという、そのギャップを埋めるというね。すごく狭い話になっちゃうと、もしゼミ生の中に研究者になりたいという学生がいたとしたら、そのまま教えてても問題はないかもしれないけれども、この大学ではそれはかなり珍しいから、どうしてもわかりやすい結果の得られるような、効率的な教え方のほうにいつてしまう。でもそれはどこの大学でもあるジレンマかもしれないですね。高校まで

だと指導要領があるので、ある程度決まったことを教えるっていうのが仕事になるけど、大学はほぼ教員に投げられてるから、われわれがやらなくちゃなんないってことになるんでしょね。

さ) やっぱり、いけないことを教えてるんじゃないですか!?(笑)。いけない教え方をしてるんじゃないですか!?(笑)

す) せざるをえないというこの苦しさですね(笑)。わかっちゃいるけど、でも...

こ) 僕の中では堅気じゃないけど堅気のふりをせざるを得ないような感覚があって、自分の経験をそのまま学生に押しつけると、先生何やってるのってことになるし、だから、もっとgeneralな方向にもっていかないと教育はできないわけですよ。それってジレンマですよ。基礎ゼミであっても。

さ) ボクらんとこの短大なんて経営実務科って言う名前のところにやってくる子たちですからね、ボクなんかのようなゼミでもイイかなって思ってしまうことがあります。

す) どういうことですか?

さ) つまり、回り道のようなプロセスとかおもしろい考え方とか感じ方とかっていうようなのを教わるようなのでホントにいいんかなってね。

全) なるほどー。

す) How-Toみたいのではないのではないのについていうことですね。

さ) そうそう。だから、これもこの前の対談で言ったんだけど、一昨年ゼミ生の一人がね、「先生に褒められるのは嬉しいです、でも、半分は、複雑」、ってね(笑)。

全) (笑)

さ) 実はそのときちょうど他のゼミ生も研究室にいて、ソレ、わかるわかる、って口をそろえたんですよ。なぜかっていうと、そのゼミ生に言わせるとね、オリジナリティのあることを言ったのに対して褒められるのは嬉し

いんだけど、つまり、私自身を認められたという意味でね、でも、いつも常識とはちょっと違うことを言うような先生みたいな人に褒められるということは、私が常識的な人じゃないって思われてるってということになるから、って言うたんですよ（笑）。

全) (笑)

さ) そういう意味で、半分は複雑、ということらしいんですよ。でも、もうすこしやり取りしてみるとね、その子が過去に自分の発言したことや感じたり考えたりしたことを吐露しても褒められたことがなかったってね。それがこの短大に来てこのゼミに入って初めて自分の思ったことを発言しておもしろいか楽しいとかいうふうにも認めてもらえたってね。でも、やっぱり半分は複雑ってね。まあそれはたぶん、心の中で二つのことがせめぎ合ってるのかもしれないですね。ホントはどれがイイんだろうとか、自分自身であるということがどのレベルでどのように統合できていけばイイんだろうとか、そういうことがわからないとか不安であるとかっていうことがあるんじゃないかと思えますね。

こ) まあその境目はその学生が最終的には決めればイイかもしれないですよ。常識的なラインとそうでないとの境目を。で、どこかで折り合いを付けて社会に出て行くという。

さ) そう、だから、そういうふうになんとわかった、つまりメタ的に見れるようになった子がゼミ生の中に出てきたので、ボクとしてはすごく嬉しかったんですよ。それでいろんなところでこの話⁽¹¹⁾をしてるんですよ（笑）。

こ) 前の対談では、教育には2つの側面があって、一つは学生に何か型を教え込む側面と、もう一つは型にはまっていた学生を型から解放する側面があると。どちらかというとならぬ先生たちは後者のタイプの先生が多

いですが、学部や学科によっても変わってくるでしょうから、どっちのタイプの教育にも開かれた場というのが必要に思いますよね。

す) その型っていうことで言うと、型を教えるっていうことも大事だと思ってます。最初はある程度こっちで手を入れて型を教える。その中から何人かがその型を離れていく、型を破っていく、というのが理想的にはイイなと思っています⁽¹²⁾。

さ) あるいは、その型をベースにして自分で作り上げていくとかもね。

—中略—

8.2 結果を出すということ

す) 4年間をいろんな試行錯誤をして良い経験しましたっていうだけで出て行くのはとってもよくないなって思ってるんです。よくいるんですよ、いろいろやって良い経験しました、でも記録は伸びませんでした、っていうのは全く意味がないんですよ。教員もソレで満足するとさらによくないですし、陸上って記録で出ますので、どんないい経験をして試行錯誤をして勉強したとしても記録が伸びなければしゃーないっていう世界なんですよ。ソレを伸ばさせないかんっていうのがあって、でも試行錯誤させたり勉強させたりっていうほうに価値をおきすぎてたときがあって、それでこっち来たときはわりと自由な感じで指導していたときがあって、ところが伸びないとしゃーないっていうところであらためて立ち帰って、で、僕の関わる範囲が少しずつ増えてきているということになってるんです。これは指導者の責任かなって。

こ) そうなんですよ、それが人文的な学問では、計れない、ということもあるんですよ。例えばソレが語学だと、資格試験のスコアでわかるんですけど、心理学や文化人類学を計る尺度ってないんですよ。

さ) 学会発表できるかどうかのレベルとかくらいですかね（笑）。

こ) そこまでいくとハードルが高くなるからね。学会発表も、先達が認めてくれるという、実は主観的な判断でしかないし、その水準が数値的ななかで保証されているというわけではないので、アカデミックな分野でパフォーマンスを伸ばすっていうのは何によって保証されるっていうのが見えにくいところがありますね⁽¹³⁾。だからこそ学生たちにはできるようになってほしいという気持ちはあるけれど、じゃあなにによってできるようになったのかっていうのは、実際にその学生が何か競技をするわけではないので、読みにくいっていうところはあるのかな。

さ) だからあれか、杉林先生のような立場の先生にとっては、競技をさせてる場面と、大学の授業なんかで教育をしてる場面とがあるから、それぞれで、一方ではスコアというようなもの伸びや成果、一方ではプロセスというようなのを学ばせるということをご自身の中で振り分けてできるっていう選択肢があるからそれらができるってことでしょかね。

す) そうかもしれません、はい。

さ) ボクラソレが、むずかしいか、うーむ。点数に当たる部分がありませんからねえ。

こ) そうですねー。

さ) だからプロセスばかりを追ってしまうところがあるのかな。授業では知識なんかどうでもよいからって豪語しちゃう場面も少なからずあるからね。15回授業あって15個も新しい言葉教えてないかもしれないってね。

す) いや、記録ってね、残酷なんです。4年間競技をやってきて、週に5日それぞれ2、3時間練習して記録伸びなかったら悲惨なんですよね。これ、このあとの生き方に影響するんですよ。

さ) こんなにやったのについてことですね。

す) そうなんです。ソレこそ自信なくしちゃってってなるんです。

こ) そういうなかで、単にいい経験したと

言っていた学生と卒業後数年して出会ったときにはどういうふうになってますか?その、記録は伸びなかったけれどっていう学生。

す) まずあんまり会わないかもしれませんね。陸上に思い入れがなくなって、あえて大学のところに帰ってくるとか部にも顔を出すとか連絡をとるとかっていうふうにならないかもしれません。たぶん気持ちが一と引くんですよ。もったいないなおもいますけどね。一方で、結果を出した学生というのは、やっぱりソレがいかされると思いますし、うまくいなくてもやっていたら結果につながると思えてるところがあるように思います。そういうのは生きると思いますよね。

こ) 教育の場面で何らかの結果が出るっていうのを簡単でも良いから設定してあげるのは効果を上げるっていう意味で必要なのかなと思いました。まあ、何でもありで頑張っているのは僕も好きなんですけれど、その中でも、あ、できた、っていうのがあったほうが、抽象的な言い方ですが、思い入れができるっていうことで、これはけっこう大きいことじゃないかなって思います。

さ) うん、まあ、だからやっぱり、2000字とか4000字のレポートは必ず書かせるとか、10分間のプレゼンは必ず経験させるとか、そういうことを3回4回と繰り返す、というようなことはあってイイと思いますね。小さなレポートとか要約とか短い新聞とか読ませてっていうだけよりもね。長いもの、深いもの、広いものっていうのを使って少しは負荷をかけるっていうことも必要だと思います。

す) 私の指導の考え方も競技的なところから来てるのが多くて、やっぱり結果をまず出さなければならぬという、そして一回出すとまた出すというふうによく連鎖していくので、しまいにはそれが自らやるようになっていくというふうにつまえていて、ゼミなんかでも

さっき話したようになんとかできるっていう課題にしておいて、そのあとおもしろいの持って来てっていうふうに最終的には至れたらあって思って、そういう共通点としてはありますね、考え方としての...

さ) あの、中途半端に終わらせると実は記憶によく残るっていうこともあって、結果はなんだったけっていう状態で社会に出すと、ソレがずうっとアタマに残ってしまうということはたしかにあるんですよね。だからボクらは結果っていうのをどうやって感じさせることができるんだろうなあっていうのはずうっと考えてることはありませんね。

こ) そこも二つの側面があって、しっかり設定するっていうのと、ある種のあきらめっていう言葉がよくないですが、何が学生にヒットするのか、さらにそれがいつヒットするのかわからない、というのがあります。大学のある授業で聞いたことを30歳くらいになって突然思い出すこともあるかもしれない。僕の授業で強く意識しているのはたくさん玉を撃ち続けるということで、いろんなことをやらせるし、どうしてもよさそうなことでも聞いてはもらう。ソレはすぐには役立つとは限らないけれど、どこかでふっと響いてくればこの授業に出てくれた意味はあるのかなっていう考えもあって、特に結果が計りにくい分野では、そういう長期的なスパンを意識します。人生の中で学生の時間よりもそれ以降のほうがよっぽど長いので、そのどこかで響いてくれば授業に来てくれてよかったなと思えるところではありますね。

さ) ああ、だから、1、2年次の教育と3、4年次の専門教育とで、ここまで話してきたプロセスと成果の与え方の違いというのがすみ分けられるのかもしれませんがね。専門のスポーツとかだとなあ、確かに結果が出てくれないと困るっていうのはたしかにあるもんなあ。

す) そうなんですよねぇ。

こ) たぶん人文学部だけでなく経済学部でも成果は計りにくい部分はあると思いますね。

さ) それをね、卒論の単位化によって計ろうっていうんだから、なかなかチャレンジングだと思うんですよね。

—中略—

9. 大学での学びと身体の使い方

9.1. スポーツを「使う」

す) 独り立ちするために教えてるっていう感覚なんです、最初に手を出すっていうのは。自分でできるようになるためのやり方を教えてるつもりで。なにもないところではなにもできないですからね。

さ) 課題の最後に書かせている感想なんかによくあるのは、大学に来て初めて〇〇を学んだので云々、っていうのなんですけど、そりゃあ大学にある科目での学びは初めてのことが多いに決まってんじゃないかって思うところがあって、3年次生にもなってなんでそんなこと書いてくるのかなあって思うことがあります。

こ) その初めてのことだったのでっていうのは、学生のある種のエクスキューズやと思っていて、だから今やった課題についてはあまり厳しく評価しないでください、っていうことじゃないかと... (笑)。

さ) あ、そっか、枕詞か... (笑)。

こ) ただ、僕が授業を通じて伝えたいと思っているのは、学生がいままで見たことも聞いたこともない研究であったりとか分野であったりとか、例えばスポーツでもいままで触れたこともやったこともない競技というのは世の中にたくさんあるわけですが、それを大学としてはまずやってみなさいっていうふうにして提供していかないといけないし、そこにふれてハマっていくものがあるかもしれないし、その競技の振興に協力してくれる様な人

になっていくかもしれない。そういう初めてのものをどんどん放り込んでいく機会をたくさん与えていくのは重要だと思っているし、何かにヒットしてこれをどう勉強したらいいんですかとなったときに、まずはこの型を身につけてねっていうふうにしてあげるのが本来の大学の姿なのかなって思います。

す) スポーツ学科の場合、何度も言っているように、スポーツの装置としての良さ、つまり成果が目に見えてわかりやすいとか、それを学科のカリキュラムとして溶け込ませるといようなことができればいいなと僕は思っているんです。こうなにかを身につけるときの段階制であったりとか、もちろん非段階制ということもありますが、そのスポーツをやることで、例えば、さっきの言語をやるっていうときに、スポーツ系の学生っていうのはアドバンテージがあるはずだと思っていて、しゃべるっていうのは運動そのものですから、ずっとやってきたはずの運動を言語の習得の際に活用できるんじゃないかと思っているんです。サッカー選手がすぐに外国語を話したりできるようになるとかいうのは、その人の中でうまく応用できてるんだと思うんです。そういったことをもっと学生に伝えたいですよ。キミたち実はいい経験してきてるんだよってね。学生にも伝えたいし、できればカリキュラムにもそのシステムをうまく活かしたいなと思います。素材はあると思うんですよ。

こ) それはほんとに重要で、高校から大学へのステップとして、いわゆる偏差値が高いっていうのは、アタマの中で記号の処理ができるかどうかということだけなので、それ以外の身体を使うっていうことをこれまで勉強だと思ってきたことに取り込んでいけるんじゃないかと思います。これはスポーツだけではなくていろんなところで応用できる考え方で、だからこそ教養教育部のWebサイト

では身体感覚を通じた学びというのが入ってるんですけども、あれは川村前部長⁽¹⁴⁾が作ったんですか？

さ) うん、原案はね。教養教育部ができたときに、身体、言語、心の動き、という3つのトピックを原案としてだして下さって、まあ、心の動きはボクから提案させてもらったんですが(笑)、そのなかでも身体の動きを見直してスキルを身につけていこうっていうのなかで、川村先生は「見直し」ということばをよく使われるんですが、それは反復しながらも見直しながらやっていくっていう観点から考えられているポリシーなんですよ。高校までのほうが実は座学が多くて...

す) そうですね、もう座学ばかりですね。

さ) うん、だから、大学にいるからこそアクティブに動きながら学んでほしいっていうのはありますね。ブローダウェイ先生によると、しゃべるときは必ず立って話すようにしてくださいっていうことにしてるらしいんですけどね、それは、しゃべるということのサインになるということのようなんです。つまり、話そうとしている自分に対しては、いまからしゃべるぞっていう自分への信号になるし、話す相手にとってもいまからあの人はしゃべるんだなっていうことを受けとめるための信号になるということなんです。そのために座ってではなくて立ってしゃべるようにさせているというんです。だから、ボくら大学の教員は、学生たちを動かして学ばせるっていうふうにながけるっていうのも大切なことになって思うようになりました。うまく身体を使わせて言動を引き出すっていうことですかね。朝一の授業だってまずはみんな立っておしゃべりしてから始めるとか、杉林先生も昨年度の共通FDで、みんなのエネルギーを上げてからっておしゃべってたように、そういうのも重要かもしれないなって思うようになったんですよ。

こ) 大人であっても90分間座ったままで話を聞き続けるというのはかなりの苦痛があるはずなんで、その形式からどこかで解放する必要があるかもしれないですね。その点においてもスポーツと教養はすごく連携できるんじゃないかと思います。その身体の使い方に関する蓄積を他の分野の教育メソッドにも入れていく部分をすごく教えていただきたいと思っていますね。

す) 反復練習なんかでも身にしみてわかっていることで、これが重要だっていうことは誰も異論がないところで実感してわかっているんですよね。まあ、それを実践に移すかどうかはまた別のことなのかもしれないですけども... (笑)。ホントはわかっている、しかもただ反復するだけではダメで、ちゃんとそこに意思を込めて毎回毎回やっていくとか、ポイントがずれててもダメですし、そういう何かを習得するということの基礎が身につくんだよって、すごく有利なんだよっていうことを伝えたいです。ところが、スポーツ学科の子たちはそのアドバンテージに気づいてなくて、いや自分は体育会系の人間ですからとか言って可能性を狭めているというか...

さ) そやねん、だから、そういうことを言ってくれる先生がいなかったんじゃないですか？

す) そうなんですかねー...

9.2. 「体育会系」を超えて

さ) やっぱりさ、ポジティブに物事を捉えようとする先生たちのなかで生きてくるっていうのはけっこう重要だと思うんですよね。そういうのを肌感覚としてとらえてきたかどうかっていうのはかなりの違いを生み出すんじゃないかとも思いますね。まあ、大学の先生たちっていうのも、ちょっとネガティブだったり、ちょっと批判的だったり、まあそれが仕事でもあるので仕方のないところはあ

るんですが、そのモードで学生と接するっていうことになるのはちょっとなあって思うことはありますね。

こ) 文化系とか体育会系とかっていうのは便宜的なカテゴリに過ぎなくて、大学というのはそういったことを相対的に見直す期間でもあると思います。高校までは文化系だという認識でいたんですけど、大学に入るとそんなことどうでもよくなりました (笑)。それが長い人生に本質的に影響するということろまではないんじゃないかっていうことに気づいてほしいし、そのためのアプローチとしても杉林先生がおっしゃったようなやり方や見方はいいんじゃないかなって思います。

す) 大学がスポーツ系の学部や学科を抱えることが多くなってきてるんで、どんどん出てきていて飽和状態ですけども、たぶんですが、大学の中でスポーツ系の学部や学科の意味ってなんなのかっていう議論があると思うんですよね。そのときにスポーツを通して、スポーツから学んできたということがいいことなんだというポジティブなとらえ方、あるいは社会にも生きるんだというとらえ方ができれば、大学の中でも必要とされるようになると思うんですが、いまはヘタしたら集客のための手段として見られてしまうということもあれば、それは全く不幸なことだなと思います。自分の世界の中ではなんとか実行しようと思ってますけども、現場をもって人や研究してる人がリンクしていったら、自分が時間や労力をつぎ込んできたことが研究することで後になってわかってくるようになると、競技に活かされていったり、またそれが研究に活かされたりっていうふうにして、学びの中心にしていける可能性があるという意味でキャラを立てていきたいですよ、スポーツ学科というのをね。

全) それでいきましょうよ！

さ) その一、スポーツ学科っていうのはどう

いう学科なんだろうっていうのもやっぱり一度聞いてみたいと思ってたことなんですよ。経済にしても人文にしてもあるいはこども学科なんかでもそれぞれの学科や学部の目的というのがわりとはっきりしているところがあるけれど、あるいはソレをもとにして作られたということがあるんですが、スポーツの場合は、そもそもボクら自身がスポーツということを取り込んだり、あるいは取り組んだりっていうふうにしてないので、感覚的にわからないところがあって、何かストンと入るものがあれば先生から聞きたいなと思ってます。だから、そういう点からの発言をもっとされていくといいんじゃないかと思えますね。

9.3 身体経験を学びにフィードバックする

さ) スポーツ学科をずっと見てこられてどうですか?

す) もうちょっとエネルギーがほしいですね(笑)。

全) (笑)

す) やっぱり立ち上げのときは、みんなスタートダッシュするので、団結力なんかも強く感じていて、また、学生たちもスポーツに慣れ親しんでくる学生は多いですが、それを継続しようというのが少なくなってきたように思います。

さ) それはなぜなんでしょうね。

す) 学生がもうやりきったという感じを持っているのかもしれませんが、深いレベルまで行きついたというわけでもないのに、ですね。

さ) そう、そのレベルっていうのはどういう子たちがやってくるんですか?

す) 一部の学生の中にはトップクラスのもいますが、多くはそうではないですね。地区レベルですね。

さ) そうすると、まあふつうの子ですよ。

す) そうですね。

さ) でも伸びる子は伸びるんですよ?

す) ええ、伸びますね。伸びる子は日本のトップになってますね。おもしろいことに、僕のゼミの学生ですが、高跳びをやっていて、日本選手権で2番になって、いまでも実業団で続けてるんですが、スポーツ学科の最優秀論文賞をとったんですが、あれは一つのモデルケースだったなと思います。高校のときはトップの一個下くらいのレベルでしたね。で、それがとてもよかったと思ったのは、勉強はいわゆる苦手な子だったんですが、理解力は誰よりもあって、陸上の関係の論文を読むとか、技術系の本を読むとか、理解力が抜群に良いんですよ。ただ、何か書かせるとまだ苦手だったりするんですよ。でもその理解力がなぜ良いのかなって思ったら、その子の競技経験で置き換えながら理解してるんですよ。それで、研究を始めるとどっぷりハマって、どんどんおもしろくなっちゃって、それは自分のやってきた経験が研究でこういうことかってわかってきたのがおもしろかったんでしょうね。その研究では本人の高跳びを対象にしたんですよ。自分のジャンプを撮影して動作分析して、重心がどのくらいの速度で上に向かうのかっていうのを跳躍の良いときと悪いときとでどうなるかっていうことについておもしろくなってきたんですね。ああいうのはスポーツ学科の目指す一つの例として勉強というよりも学びが活かされたという良い例ですね。こういうのはスポーツ学科以外で起こるのは難しいのかなって思っています。

こ) 自分の身体での経験を学びにフィードバックしていったっていうのは他の学科ではなかなか出てきにくいですよ。

さ) うん、やっぱり、自分のことに関連することを研究しようっていう学生は、取り組みがとても良いですよ。短大のうちのゼミ生でもね、自分のお化粧品で、ボクも知らなかったんだけど、公的自己意識って言うんだけど、

他者が観察できる自己の外面に関する意識ですね、そういうのを自分で調べてきて、それを口紅の濃さで計れるかっていうことを考えていて、口紅の薄いのから濃いまでの画像刺激を作って、実験まではいかなかったけれど、アンケート調査で調べてみて、どこからどこまでの濃さならある特定の場面や状況でOKかNGかっていうのを調べたんですよ。また、ネイルの好きな学生がいて、アルバイト先でシンプルなのだったとしてもイイよって言われたらしいんだけど、じゃあシンプルって何かってというのが問いで、シンプルとはなにかというテーマについて、自分でネイルのデザインをして刺激を作って調査するとかね。まあその子は結局報告書は出さずに出て行っちゃった「強者」だったけれどね(笑)。まあいずれにしても、学生自身の何かと関連するモノやコトについてのテーマだとしてもいろいろと考えようとするみたいですね。

こ) それって、自分のことでもあるし、自分の身体のことでもありますよね。逆に抽象的な自分の何かだと自意識過剰になって袋小路に入っちゃってむずかしくなりますよね。具体的な自分の身体っていうところに立脚すると、地に足のついた議論もできるし、イイものが出てくるということですね。

さ) あとその子自身が感じていることを他人と比較したりというのがありますね。

す) 自分をテーマにするというのは一つのやり方ですよ。

ざ) 自分を相対化する試み、とでも言えいいんでしょね。自分自身が今まで思ったり感じたりしてきたことを他人と比べてあるいは平均と比べてどうかということを考えてほしいと思いますね。小西先生がおっしゃってたように、知らないからこそ自信がないということなのかもしれませんからね。だからオトナになるために自分を相対化する試みを

しておく必要があるのかもしれませんが。それができるのが高等教育機関であって、中等教育まではある箱の中で教わったり考えたりする訳なので、価値観がすごく狭くて、あっち行ったりこっち行ったりしながら暮らしたり、場合によっては消えてしまいたくなる子たちも出てくるということなんだろうと思います。そういうことを自由に創造的に考え直せる、見つめ直せるっていうのが大学や短大なわけで、そういう観点からゼミの指導はするようにしています。

こ) その話でいけば、高校まででトップレベルにある選手たちというのは、自分を客観視できてるということでしょうね。

さ) またそれは上に行けば行くほど相対化せざるを得ないでしょうからね。

こ) そう考えると他の学部の学生たちもスポーツやってくれて思ったりしますね。人文学部の学生にとっては留学がそれに当たるんじゃないかと思います。留学は言ってみればエラーだらけになっちゃうし、まず自分の言いたいことが必ずしも伝わらないし、空港についてもまず迎えが来てないとかいうところから始まるから、これまでにエラーを避けてきた子もエラーと向き合わざるを得なくなる。そこで打ちのめされながらも顔つきがちよっと変わって帰ってくるわけです。それはまあ荒療治のようではあるんですが、そういうのを穏便に入れることができれば、大学の教育もイイように変わっていくんじゃないかと思うんです。

す) 大学の中で飛躍させられるといいですよ。レポートはうまく書けないけれども、論文は読めちゃうっていうのは、ある意味飛躍なんですよ。その学生は学会発表までやって、ずいぶん自信になってると思うんですよ。

さ) だからあ、中位のレベルの子たちにもそういう経験させられるかなっていうのが

われわれ教員の仕事でもあると思ったりもします。どうやるといいですかね？

こ) そのまともめにも入りたいところですが、どうするといいでしょうね？

—中略—

10. 社会への助走—ホップとしての学生時代—

す) くやしいですけど、社会に出るとすごくよくなりますよね(笑)。

全) ホントにくやしいとこです。

こ) 今日のお話からすると、そこを理屈で解決するのではなくて、こちらが語りかけるだけで何かその子を方向付けるというよりも、まずは動いてみろって言うところから始めることで響くことがあるのかもしれないですね。

す) 難しかった学生が社会に出て、しばらくして戻ってきたときに、見違えるようによくなっていることに遭遇することがありますが、それは社会に出るとやらざるを得ない場面が多いからだと思いますね。大学ほどには当然守ってくれませんか。仕事仲間になるので、もうやらなければならない状況におかれて、トライアルアンドエラーはありながらも急激によくなっていくんですよ。助走期間が大学で、そこからがとと上がって行って、いままではいったい何だったんだって言うくらいにね。それを学生のときにもうちょっと何かしたいですよ。

さ) ゼミなんかの場合、各担当者が主なテーマについて説明したりシラバス配布したりして学生からの希望を取って配属が決まるでしょ。ところが、第一希望でやってきてる学生たちがほとんどであるにもかかわらず、モチベーションのいまいち上がらないように見えるゼミ生がいるんですよ。でもよく考えてみると、そういう子たちを卒業の時点でちよびつとでも、さっきおっしゃった言い方

だと助走のちょっと終わりかけるこれから飛ばうというところへんまでは行かされてるのかもしれない。われわれが評価しきれてないって言うだけでね。ボクらはどうしても求めてるもののレベルがありますからね。

こ) さっきの踏切りの話だとホップの瞬間のところですね。

さ) そうそう、その一瞬にもういるんだけどそれをボクらが評価できてないのかもしれないです。あるいはまた、ゼミではそのテーマを発信してるんだけど、どうもその方向に向いてない子たちがやって来ることがあるのは、だからこそそのテーマで教育したり学びの機会を与えたりして学生たちに教員がなっていてほしい姿に向かわせるということが実は大切なのであって、最初から、ゼミに入ったときからそのゼミのテーマのことがわかってたりできてたりするんだったら、極端な話、教育しなくていいわけですからね(笑)。

す) 期待を込めて言うならば、学生のときにそれを学んでたんじゃないかっていうことですよ(笑)。

全) そうそうそういうこと(笑)。

す) 社会に出たらこれがそうだったんだなっていうのを思い出してね。期待を込めてですけどね。

こ) 種はまいてたのかなってね。

さ) そう、だから、評価はできてなかったけれども、学生の中にプライミング⁽¹⁵⁾はされてたというね。モチベーションの上からない感じとか興味がないような感じとかに見えても、それは単に見えてただけであって、徐々にゼミの間にも他の科目を受ける間にも培われているんでしょうね。そりゃあゼミ生の全員が担当者のテーマに興味や関心を強く持つてるんなら動機づけのところなんて特にcontrolしなくていいわけですが、実際にはそうじゃない子たちだからこそそのゼミにい

るんだっていうふうに考えなおすほうがいいのかも说不定です。どこかにそういったゼミのフィルタがその子にかかっただけでもよしとするかってね。まあそういう話を短大の先生方と前にもしたことがあるんです。

す) やっぱりその、社会に出ていかせるような、経験と言えはそれまでですけども、レポートの書き方一つを取っても、資料の探し方にしても、報告の仕方にも、教員の反応に対しての返し方とか、そういうことをたくさんやって、もちろんそのときはうまくいなくて自信がないかもしれませんが、それはもう恐れずにやってかなきゃなんないですよ。

さ) それはね、ボくら教員もそうなんだと思うんですよ。諦めずにやらないとですね。アタマもカラダも動かしながら、ですね。

す) そうしないと、あの社会に出たときのあの飛躍がね...。社会にそんなすばらしい教育システムがあるのかと思っちゃいますからね。

こ) うん、それに、大学ではまるで何もやらなかったみたいに見られるのもシャクだなあと思うわけでね(笑)。

全) (笑)

こ) 何かはやってきたやろう、何かはやったはずだってね。まあそうなるように頑張っ行って行きましょってことですかね。

す) 長い助走期間だと捉えてね。

さ) そうですね。それと、教員個人個人だけでなく、組織が諦めちゃうないってこともとても大事だと思うんですよ。学科や学部や大学がね。

11. 身体と総合性

さ) もうひとつは、いわゆるこれまでの「体育会系」というのではなく、リカレントと結びつけられるような、つまり生涯教育とか生涯スポーツという文脈で考えるのが、個人的

にはスポーツのあり方としてはしっくりくるんですよ。脳科学でも、身体運動と脳の機能との関係というのは、かなり相互に影響し合ってることがわかってきてますから、カラダを動かすことが脳への影響になるっていうね。

す) スポーツは、総合的な分野なので、スポーツ生理学とかスポーツ社会学とか、いろいろな領域が統合された分野なので、いろいろな情報をまとめて新たなものを見いだしていくという意味でも、いまの社会には十分合ってると思うんですよ。

さ) そうですね、前回の対談でも「総合性」というのがキーワードになってましたね。

こ) そうそうそう、応用していく力とか、関係のなさそうなところに関係を見いだしていく力とかはAIじゃなくて人間だからこそできる力なのかなって、今の段階では言えると思いますね。100年後どうなるかわからないですけども。

す) 体性感覚で学んでいって、それをリアルな生き方に活かしていけるたくましさとか、そういうのもスポーツ系の価値なんですよ。

さ) eスポーツはどうですか？

す) ああー...あれは...、揺れてますね。個人的にはあれがスポーツなのかっていうのが受け入れられないんですが、でもスポーツになりつつあるんですよ!?スポーツって何かっていう話かと思うので、新たなスポーツ観をもたなければならぬですよ。

さ) ただ、やってる人たちは頭も身体もかなり鍛えてるようだし、その点ではフィジカルであるとも言えますが...

す) 操作や画面や相手についての部分をスポーツとみるかっていうのがありますね。

さ) 思考がダンスだとか言語がダンスだとかいう言い方で言えば、ダンス的なスポーツと言えるかもしれません。ただ、全身性という

のは低いように感じますから、従来のスポーツ観からすると違って見えるということなのでしょうね。

こ) まあそれは、数十年後になんらかの technology によって人間の身体感覚が変化してしまうということが起きるなら、そういうのも普通のものとして身体に取り込まれていくということはあるかもしれませんね。この前のゴリラから見る AI 社会という講演⁽¹⁶⁾でも、人間同士はまだこの身体のコミュニケーションで成り立っているけれども、何十年後にはかなり拡張されたことになってる可能性もありますからね。

さ) 例えば、将来、海に住む、宇宙に住むということになれば、全身性という身体感覚は薄れていくことになるので、どこまでを身体とみるかっていうのは、ありうる話でしょうね。また、Trancehumanism というような技術や思想もこれからはどんどん出てくると思われるのでね。

す) おさまりどころがよくわからないところがあって、もちろん、次第にいろいろと整理して受け入れていくんだろうと思いますけども…。

さ) …まだそのカテゴリがちょっと離れたところになる感じということですね？

す) そうですね。

さ) 境界までは来てないってことですね。まあ、でも、あんなに筋トレしたりして鍛えながらやってる彼らを見ると、ボクなんかはスポーツでいいんじゃないかなって思っちゃいますけどね(笑)。全身を効果器として働かせてやっておられるいまのスポーツ選手や関わっておられる人たちから見れば、かなりの違和感はあるのかもしれませんがね。

す) そうですねー。いまのところね。

12. おわりに

情報化による意思の疎通や言動の自由が成り

立つ現代のような社会では、身体性を切り離して心理的な事象を捉えたり、バーチャルのほうがよりリアルであるというような感覚になったり、感情の要らない世界のほうが楽だと感じたりする人たちがでてくることを想定しておく必要のあることは、教育に携わる中で日々感じられることである。これは、モノに対するアフォーダンスだけでなく、人やコトに対してもある種のアフォーダンスとも言える情報のありかたを変えられてきていると思われる今日の状況が、それらとの間で関係づけられる世界観も変えられていくことを意味する。

人間は、人やモノやコトや価値や考え方などの様々な関係性を保つために、外からと内からの両方から相対化の試みをし続けているはずである。しかし、はたして身体との関係を無くしてしまっただけでそれができるだろうか。いまの人たちは自分の言動を撮って外から見ようとしたり、評価してもらおうとしたりする傾向がある。身体感覚の観点から言えば、そもそも固有感覚⁽¹⁷⁾のようなチカラは必要ないのだろうか。自らの身体をどのように動かしたり使ったりしているかという感覚無しに、論理や思考だけで人間と世界の関係は成り立つだろうか。だからこそ、いまの時代は、身体的にも精神的にも総合性を求められるような学びや教育が必要とされていると言えるのかもしれない。

今回の対談では、身体を通じた教育と学びの相互作用、身体の動きの学びへの活用、身体経験の学びへのフィードバックなど、スポーツをどのように教育に「使える」可能性があるのかについて議論してきた。それは、単にスポーツを通じて集団行動や規範を身につけるというレベルの問題ではなく、身体を足がかりにどのように自分の世界を広げていけるのかという問題とつながっている。

そのなかで、教養教育が「過程」を重んじる場合が多いのに対して、スポーツの世界は、過程だけでなくその行為の「結果」が重んじられ

ているという対照的な性格も明らかになった。教養とスポーツあるいは身体性との関係を考えていくとき、この違いは教育観の大きな違いであると言える。一方で、教養教育においても身体を通じて学びを「見える化」し、教育方法論にフィードバックさせる意味をあらためて知ることができたとも言える。身体を持つエネル

ギーと心の作用をうまく融合させ、統合し、総合的な「教養力」⁽¹⁸⁾を身につけるという方向性は、いまの社会で人間として生きていく上で大きな学びの活性につながるものになると考える。

注

- (1) 2019年7月20日、ロンドンで行われた陸上競技最高峰の大会のひとつ、ダイヤモンドリーグ第10戦において、小池祐貴選手が男子100mで日本人3人となる9秒台、9秒98(追い風0.5メートル)をマークした。小池選手を指導する臼井淳一コーチは「練習で全力を出し切らない」(『朝日新聞デジタル』2019年7月22日)ことを重要視し、頭も体も余裕を持たせたサブマックスのスプリント練習で小池選手の記録を伸ばしてきた。
「9秒台小池、躍進支えた臼井コーチの異色の経歴と指導法」, 朝日新聞デジタル, 2019年7月22日 (<https://digital.asahi.com/articles/ASM7P55LKM7PUTQP022.html?rm=255>, 2019年7月26日閲覧)
- (2) 毎年夏から秋にかけて能登各地で行われる祭りには、能登キャンパス構想推進協議会による「能登祭りの環インターンシップ」をはじめとして、本学の学生が多く参加している。
- (3) 本学の各部の教員の代表数名から成るFD組織で、年度毎に複数のテーマについてそれぞれ議論を重ねるFD活動である。ここでは1年次基礎ゼミナールに関するテーマを扱う共通FDを指している。
- (4) ドリルのように、試合運動を要素に分割して行うトレーニング方法のことを「分習法」、全体を通して行う場合を「全習法」という。また、全体を通して行いながらもある要素を強調して行う場合は「分習的全習法」と呼ばれ、試合に向けての仕上げ練習でよく行われるものである。
- (5) 『ことばと身体—「言語の手前」の人類学』菅原和孝(講談社, 2010年)には、「言語の手前」という表現がある。また、『勤の研究』黒田亮(講談社, 1980年)も参考となる。
- (6) 注3と関連して、来年度2020年度から経済学部と人文学部の1年次学生を対象に新しく開講される「教養ゼミナール」では、クォータ毎にゼミの担当者が入れ替わる形で担当し、担当者の専門分野周辺のトピックと方法論の多面化による学生の多様な学びと、複数の担当者による協同的な教育のありかたを実現できるようなデザインでの新しいゼミナールを共通FDにおいて議論している。
- (7) 本学の各学科の入学定員は、経済学科270名、経営学科170名、スポーツ学科75名、こども学科68名、国際文化学科75名、となっている(2019年度現在)。
- (8) 注6参照。
- (9) 佐々木担当の共通教育科目の一つ。複数の担当者で担当している。
- (10) 佐々木は実際には、青を入れる。添削の仕方は大学院生の頃から決めていて、原文には赤でマーク、コメント挿入には緑で入力、追記や加筆の必要な箇所は青で入力、削除してほしい部分は二重取消線でマークしておく。
- (11) その後、卒業した後に送られてきたメールの一部を本人の許可を得て紹介する。
先生には、思い切り自分が疑問に思うことや、自分の考えていることなどを伝えることが出来ました。
人に自分はこういうことを考えていると伝える時、相手にまず伝わるか…理解して貰えるか…などを先に考えてしまい、苦手だなあと感じていました。
しかし、先生にはなんだか安心して(なんとか理解してもらえそうと思え)自分の考えを書いたり話したりすることができて、さらに先生は褒めてくれるので(笑)…少し自信を持つことができました。
これからは、もっともっと自分の考えを人に言えるように頑張りたいと思います!また先生お話を聞いてください!!
先生に褒められると複雑…と言っていたわたしですが、本当はいつも心は大喜びだったので、また褒めてください(笑)(でもやっぱり複雑かな)
- (12) わざや知識、技能の伝承や「型」についてのさらなる考察には、以下の文献が参考になる。

『「わざ」から知る』生田久美子（東京大学出版会, 1987年）

『日本文化の模倣と創造—オリジナリティとは何か—』山田奨治（角川学芸出版, 2002年）

『熟練技能の継承と科学技術』村川英一（大阪大学出版会, 2002年）

- (13) 自然科学, 社会科学分野では, **Web of Science**に収録された学術雑誌掲載論文の被引用数をもとにした「インパクトファクター」が業績の質を示す指標として用いられる場合があるが, 人文科学ではあまり重視されない。また学部教育では雑誌論文レベルを前提とした指導は通常行われないため, パフォーマンス評価には別の指標が必要とされる。
- (14) 前教養教育部長で, 現人文学部特任教授。この対談シリーズの第2回のゲストでもある。
- (15) 先行刺激やその処理が後続刺激に関する処理を促進または抑制する効果のことを指す心理学における用語で, 潜在的つまり無意識的な処理によって行われる特徴があり, 知覚や意味処理のレベルで生じるとされる。
- (16) 2019年2月に本学で開催された, 金沢星稜大学学会人文学部会・教養教育部会主催講演会。京都大学総長の山極寿一氏らを招いて行われた。
- (17) 筋・腱・関節にある固有受容器を使った身体の運動や位置についての情報で, 身体がどのように動いたり変化したりするかを捉える。
- (18) 佐々木康成, 小西賢吾, ブローダウェイ リック, クラッスン マーシャル(2019)総合性指向で「教養力」を培う— ローカル最適化からの解放に向けて—, 金沢星稜大学人文学研究, 第3巻第2号, pp.63-88。

